九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

香港海事博物館編『明代海洋貿易、航海術和水下考古研究新進展』

中島, 楽章
九州大学大学院人文科学研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/4403432

出版情報：九州大学東洋史論集. 48, pp.57-67, 2021-03-26. The Association of Oriental History, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

香港海事博物館編『明代海洋貿易、航海術和水下考古研究新進展』

中　島　楽　章

1　「セルデンの中国地図」の発見と研究

近年の東アジア海域史研究において、特に重要な新資料の出現として注目を集めたのが、いわゆる「セルデンの中国地図」(The Selden Map of China、以下「セルデン地図」と略称）の再発見である。この地図は17世紀初頭に作成されたと考えられ、南シナ海域を詳細・正確に描写しており、「交易の時代」における華人海商の航海・交易活動を反映した、貴重な同時代資料である。そこでは福建南部の漳州湾を起点に、フィリピン方面への「東洋」航路と、インドシナ半島からジャワ島にいたる「西洋」航路が精密に記されており、このため中国語圏では「明代東西洋航海図」などと呼ばれている。

セルデン地図の発見とその研究の進展をうけて、香港海事博物館では2014年3-6月に、セルデン地図を所蔵するオックスフォード大学ボドリアン図書館との共催により、ボドリアン図書館所蔵の明代の地図・航路誌・磁器の特別展を開催している。さらに2014年6月7-8日には、香港海事博物館で「明代海洋貿易、航海術和水下考古研究新進展国際会議」が開催され、中国語圏と欧米の各分野の専門家が、セルデン地図とそれに関連する諸問題について報告と討論を行った。そして翌2015年、この国際会議と特別展の成果として、論文集『明代海洋貿易、航海術和水下考古研究新進展』(*New Research into the Maritime Trades, Seafaring and Underwater Archaeology of the Ming Dynasty*）と、図録『針路藍縷　牛津大学珍蔵明代海図及外銷瓷』(*Mapping Ming China's Maritime World: The Selden Map and Other Treasures from the University of Oxford*）が、香港中華書局から2冊1組で刊行されたのである。

図録『針路藍縷』には、ボドリアン図書館が所蔵する16-17世紀の中国・日本・西欧製地図や、明末の輸出磁器の図版とともに、明末清初の航路簿

『順風相送』・『指南正法』全文の原色影印本も収める。この両書は1936年に向達がボドリアン図書館で発見し、のち『両種海道針経』（中華書局、1961年）として刊行したものである。さらに本書には、セルデン地図の大判の複製も附されている。なおボドリアン図書館のホームページでも、'The Selden Map of China'（https://seldenmap.bodleian.ox.ac.uk/）として、セルデン地図の画像データが公開されており、細部を拡大して詳細にその描写を確認することもできる。一方、会議論文集『明代海洋貿易、航海術和水下考古研究新進展』では、セルデン地図とそれに関連する明末海域史についての論考、計19編を収録している。

この論文集の内容を紹介するにさきだち、まず龔纓晏・許俊琳「《雪爾登中国地図》的発現与研究」（李慶新・胡波主編『東亜海域交流与南中国海洋開発』科学出版社、2017年）を参照して、セルデン地図の発見過程と研究史を簡単に紹介しておこう。なおここではセルデン地図の関連文献としては、この地図に関わる専著だけを紹介することとし、その他の研究文献については、上記の龔纓晏・許俊琳論文を参照していただきたい。

セルデン地図は17世紀イングランドの著名な法律学者で東洋学者でもあったジョン・セルデン（John Selden）の所蔵品であり、彼の死後、遺言によりボドリアン図書館に寄贈された。その後、この地図の存在は長く閑却されていたが、2008年にいたり、アメリカのジョージア・サザン大学の英国史研究者ロバート・バチェラー（Robert Batchelor）が、同図書館でこの地図を発見し、その存在がはじめて学界に知られることになった。セルデン地図は縦158ミリ、横96ミリの大判の彩色手書き地図であり、中国大陸と南シナ海域を中心に、東シナ海域やモンゴル高原も含むアジア東部が精密に描かれ、海上には漳州湾を起点とする多くの航路も図示されている。

セルデン地図の発見は、中国語圏や欧米の学界に大きな反響を呼び、その後10年あまりの間に、すでに多くの関連する論著が発表されている。まず2013年には、北米の代表的な明代史研究者であるティモシー・ブルック（Timothy Brook）が、本図に関する専著として、Timothy Brook, *Mr Selden's Map of China: The Spice Trade, a Lost Chart and the South China Sea*（London: Profile Books）を刊行した。同書はセルデン地図の成立・伝来過程とその内容を、明末の東アジア海域の状況に加え、セルデンの事跡やイングランド東洋学の形成などの、幅広い歴史的文脈から論じている。2015年には同書の和訳本として、ティモシー・ブルック（藤井美佐子訳）『セルデンの世界

地図　消えた古地図400年の謎を解く』が刊行されており、評者もこの和訳本を参照した。

翌2014年には、セルデン地図の発見者ロバート・バチェラーが、*London: The Selden Map and the Making of a Global City, 1549-1689*（Chicago: University of Chicago Press）を刊行し、最近では Hongping Annie Nie, *The Selden Map of China: A New Understanding of the Ming Dynasty*（Oxford: Bodleian Library, 2019）も出版されているが、評者はいずれも未見である。また中国語圏では、2013年に湯錦台が『閩南海上帝国 ── 閩南人与南海文明的興起』（如果出版社、）を刊行し、閩南海商の南海貿易の成果として、セルデン地図を紹介している。

セルデン地図には作者・作成年代・成立過程を直接的に示す手がかりはなく、多くの論者がさまざまな推定を試みている。中国語圏の研究者からは、1624年ごろ『東西洋考』の編纂に際して作成されたという説、1607年ごろフィリピン在住の閩南（福建南部）出身者が作成したという説、17世紀前半に東・南シナ海域を往来した閩南商人を作者とする説、1628年以降に鄭芝龍の海上勢力が作成したとする説、1619-24年に李旦の海商集団が作成したとする説などが提示されているが、いずれも推測の域を出ない。

一方、ブルックはセルデン地図の成立時期について、モルッカ諸島に「化人（スペイン人）住」・「紅毛（オランダ人）住」という注記があることから、オランダがモルッカ諸島に要塞を建設した1607年以降とする。またブルックはセルデンの遺言書に記された、あるイングランド人司令官が華人商人から本図を入手し、十分な請け戻し金を提示されても返さなかったという記事に注目する。そして『パーチャス廻国記集』（1625年刊）に、1604-09年にバンテンのイギリス東インド会社員ジョン・セーリス（John Saris）が、華人海商から借金のかたに押収した中国地図を掲載することから、セーリスはこの際にセルデン地図も華人海商から入手したと想定する。そしてこの地図は1608年ごろにバンテンで作成され、ついでセーリスの手に渡り、のちに東インド会社の航海司令官となったセーリスが本国に持ち帰って、セルデンの手に渡ったと推定している。

これに対し、本図の発見者バチェラーは、セルデン地図では特にルソン島の描写が詳細なことから、この地図は1610年代以降、バンテンではなくマニラで作成されたか、少なくともマニラへの航海を熟知した人物によって作成されたとみなし、具体的には李旦かその関係者によって作成された

と推定している。このようにセルデン地図の作者・年代・成立過程をめぐる議論は、現時点でもなお決着を見ていないが、そのなかではブルックの所説が、セルデンの遺言書や『パーチェス廻国記集』などの具体的な記事を論拠としており、具体的な傍証に乏しい他の諸説よりは、比較的無理のない仮説となっているように思われる。

2　本書の構成と概要

2014年６月の香港海事博物館における国際会議では、セルデン地図とそれに関する諸問題をめぐって、各分野の専門家による報告が行われた。本書ではその成果として、全６部、計19編の論考（中国文11編、英文８編）を収録している。各論考の著者とタイトルは下記の通りである。

Section 1: The Selden Map ／明代東西洋航海図

James K. Chin（銭江）, The *Selden Map* and the Hokkien maritime trade in late Ming（セルデン地図と明末福建の海外貿易）

Robert Bachelor, Viewing the East Asian archepelago through the *Selden Map*（セルデン地図に見る東アジア諸島）

Fung Kam Wing（馮錦栄）, Issues in the history of cartography of East Asia from the late sixteenth century to the early seventeenth century: the *Selden Map* and *Sinarum Regni aliorūq. regnoru et insularū illi adiacentium descripti*（16世紀末～17世紀初の東アジア地図学史の諸問題 ── セルデン地図と「中華帝国と周辺王国・島嶼図」）

Section 2: Seafering of the Ming dynasty ／明代針経

陳佳栄　明代的海路、海図及針経（明代の海路・海図と針路誌）

謝必震　《順風相送》与中琉関係（『順風相送』と中琉関係）

劉義傑　《順風相送》研究八十年（『順風相送』研究80年）

汪前進　清代針路簿 ── 《指南正法》中的航海名詞術語系統（清代の針路簿 ── 『指南正法』における航海名詞の術語体系）

Section 3: Archeology of shipwrecks in the Ming dynasty ／明代沉水考古

崔勇　「南澳１号」沉船与明代外銷瓷（「南澳１号」沈没船と明代の輸出磁器）

羊沢林　従福建明代沉船出水瓷器探討景徳鎮瓷器外銷的幾箇問題（福建の明代沈船発見の磁器による景徳鎮磁器輸出の諸問題の検討）

臧振華　近来台湾水下考古的発現（近年の台湾における水中考古学の発見）
焦天龍　南海沉船与明代海洋貿易的変遷（南海沈船と明代海洋貿易の変遷）

Section 4: Maritime history of the Ming dynasty ／明代航海史

Roderich Ptak, Some notes on Nan'ao Island in Portuguese sources of the sixteenth century（16世紀のポルトガル史料における南澳島に関する覚書）
Stephen Davis, On courses and course keeping in Ming dynasty seafaring: probabilities and improabilities（明代における航路と航路定位 ── その可能性と不可能性）

Section 5: The Selden Map Revisited ／《明代東西洋航海図》再探

K. L. Tam（譚広濂）The *Selden Map*, its cartography, and its probable link with early seventeenth century Asia silk trade（セルデン地図の作図と17世紀初頭のアジア絹貿易との関連の可能性）
朱鑒秋　《明代東西洋航海図》在南海史地研究中的価値（『明代東西洋航海図』の南海歴史地理研究上の価値）
陳泳昌　由分野標記試論《明代東西洋航海図》之成図年代（分野標記による『明代東西洋航海図』成立年代の試論）
Robert Minte and Marinita Stiglitz, The conservation of the *Selden Map* and its display at the Hong Kong Maritime Museum（セルデン地図の保存と香港海事博物館での展覧）

Section 6: Ming China and Southeast Asia ／明代中国与東南亜

周運中「英蔵明末閩商航海図出自厦門湾」（英国所蔵の明末福建商人航海図は厦門湾に由来する）
Geoffrey Wade, Some Southeast Asian place names in the Mao Kun maps, *Shunfeng xiangsong* and the Yale University Library Chinese navigational map book（茅坤地図・『順風相送』・イエール大学図書館蔵中国航海図集における若干のアジア地名）

このように本書では、中国語圏（大陸・香港・台湾）と欧米の研究者が、17世紀前半を中心とした、南・東シナ海域の海上貿易・航路誌・陶磁史・水中考古学などをめぐる諸問題について論じている。ここでは19編の論文すべてを紹介する余裕はないが、セルデン地図自体に関わる論考は次節で紹介することとし、まずそれ以外の論文から、評者の関心に応じて数編を紹介しておきたい。

まず海上貿易史については、James K. Chin, “The *Selden Map* and the Hokkien maritime trade in late Ming” が、明末福建海商の海外貿易を、マニラ・九州・バンテンの三地域への交易活動を通じて概観する。マニラはバチェラーにより、バンテンはブルックにより、セルデン地図の作成地として想定されている地域であり、この論文は本書の冒頭にあって、セルデン地図をめぐる議論の背景を提示する意味をもっている。また Roderich Ptak, “Some notes on Nan’ao Island in Portuguese sources of the sixteenth century” は、福建・広東境界の南澳島に関する16世紀のポルトガル語史料を、メンデス・ピント『東洋遍歴記』を中心に紹介する。『東洋遍歴記』には史実とフィクションが混在するが、ポルトガル人が南澳島に寄港して水や食糧を補給し、あるいは華人海寇や密貿易者と接触していたことを記している。ただしポルトガル人のマカオ定住以降は、南澳島の寄港地としての重要性は低下し、マカオから日本に向かう際の航路標識や避難港となっていたという。

航路誌については、劉義傑「《順風相送》研究八十年」が、ボドリアン図書館所蔵の『順風相送』について、その成立年代と作者に関する研究史を紹介する。著者は従来の研究をふまえて、当時の針路簿は外洋船の火長（航海士）が共通する母本をもとに、各自の航海経験をふまえて記録したものであり、『順風相送』は明末期に華南海港附近の文人書生が、複数の針路簿を寄せ集めて筆写したものだと推定している。なお劉義傑はその後、単著として『《順風相送》研究』（大連海事大学出版社、2017年）を刊行した。同書では『順風相送』の成立過程と針路情報を全面的に検討し、かつ同書の白黒影印版と、それに基づく正確な標点テキストを収録しており、今後の明代針路史研究の基本文献となるだろう。

水中考古学については、崔勇「「南澳１号」沉船与明代外銷瓷」が、2007年に福建・広東境界の南澳島で発見された「南澳１号」の調査成果を紹介する。「南澳１号」では、特に福建南部の漳州窯磁器が多数発見され、景徳鎮磁器がそれに次ぐ。同様の漳州窯磁器は、日本やエジプトの遺跡や、フィリピンや西アフリカの沈没船からも多数発見されており、漳州で海外市場向けに生産され、漳州湾の海澄（月港）から輸出される途中、南澳島近海で沈没したと考えられるという。また羊沢林「従福建明代沉船出水瓷器探討景徳鎮瓷器外銷的幾箇問題」は、福州近海で発見された、16世紀初頭と16世紀末以降の沈没船に積まれた景徳鎮の民窯磁器を比較し、前者は国内向け産品が大部分を占めるのに対し、後者はクンディやカラック磁器など

の大量の輸出用産品を含むことを指摘し、16世紀の間に景徳鎮で海外市場磁器の生産が発展していることを指摘する。

本書にはこのほかにも、各種の文献史料や考古資料により、セルデン地図と同時代の東アジア海域史の諸問題について論じた研究が収められている。会議論文集という性質上、本書には必ずしも共通した論点や結論があるわけではないが、全体として当時の東アジア海域史をめぐる、多様な史資料による研究の可能性を示しているといえるだろう。

3　セルデン地図の作者とその成立過程をめぐって

前述のように、セルデン地図の作者と成立過程については、中国語圏や欧米の研究者によって議論が続けられている。本論文集でも、この問題について考察した論考がいくつか収録されている。ここではこれらの諸論考について簡単に紹介しておこう。

まず Robert Bachelor, “Viewing the East Asian archepelago through the *Selden Map*” では、セルデン地図の発見者バチェラーが、同図における海域アジア東部の島々の描写について論じている。バチェラーは本図では東部アジアを明朝中心の朝貢関係ではなく、交易システムの観点から描写していると説き、特に福建海商の海外貿易におけるフロンティアであった、日本・フィリピン・マカッサルなどの島々の描写に検討を加えている。

ただしバチェラーはもともとアジア史研究者ではないため、特に日本に関する地理認識には問題点も多い。たとえば日本本土の一部のように描かれた「七島山」を、伊豆七島から遠望できる富士山を指すとみなし、本図は中国製日本図として富士山と佐渡島を最初に描いたものだとする。しかし「七島山」は単に伊豆七島を誤って本土上に描いたものだろう。また佐渡島は嘉靖40（1561）年序刊の鄭若曽『日本図纂』「日本国図」にも描かれ、成化７（1471）年成立の朝鮮史料『海東諸国記』「日本本国之図」にも富士山と佐渡島を明記している。さらにバチェラーは「七島山」北方の「鏸州」と記された島を蝦夷だとみなすが、これは陳佳栄が比定するように「総州」すなわち房総半島の誤りであろう（「《明末疆里及漳泉航海通交図》編絵時間、特色及海外交通地名略析」『海交史研究』2011年２期）。また「七島山」東南の「上好州」という島を伊豆諸島と見なすが、これはおそらく「土佐州」の誤記ではないだろうか。

バチェラーはセルデン地図における日本描写から、閩南海商の交易フロンティアへの地理認識の拡大を看取しようとするようだが、むしろ本図の顕著な特徴は、東シナ海域の描写が南シナ海域よりもはるかに粗略で不正確なことである。日本は中国東北海上の、南北に長い楕円状の一大島として描かれ、その南端に尻尾状にのびた小半島に九州諸港が記されており、15世紀の『海東諸国記』や16世紀の『籌海図編』における行基図式の日本図に比べても大きく後退している。また朝鮮は南北に細長い半島として描かれるが、港名や都市名はいっさい記されておらず、渤海沿岸の山東・遼東半島もまったく描かれていない。１本図での南シナ海域の正確な描写と東シナ海域の粗略な描写の落差は、むしろ東シナ海域と南シナ海域で活動する閩南海商が、それぞれの航海・交易活動によって蓄積された地理情報を必ずしも共有していなかったことを示している。

ついでFung Kam Wing（馮錦栄）, “Issues in the history of cartography of East Asia from the late sixteenth century to the early seventeenth century” は、同時代のヨーロッパ製地図との関連が注目されてきたセルデン地図について、イスラーム圏の地図との関連性を想定する。馮錦栄が注目するのは、セルデン地図の上部に描かれた、八卦と干支で24方位を図示した円盤状の羅針図と、その下部に配置された定規状の尺度、およびそれらの右側に記された、長方形で内部が空白の二重枠線である。この羅針図や尺度は、一般には同時代のヨーロッパ海図に描かれた羅針図（コンパス・ローズ）や尺度の影響だと見なされている。これに対し、馮錦栄はオスマン帝国の海軍提督ピリ・レイスが1510-20年代に作成した一連の世界図に、やはり羅針図と尺度が描かれており、内部を方眼状に区切った長方形の枠線を記すものもあることに注目し、セルデン地図を作成した華人が、ムスリム航海者を通じてこれらの地図を参照した可能性を指摘する。

ただしピリ・レイスの世界図に描かれた羅針図と尺度は、それ自体がヨーロッパ製海図を模倣して描かれた可能性が強い。またセルデン地図に描かれた長方形の枠線は、同時代のヨーロッパ世界図における、地図全体の解説文を記した長方形の枠を想起させ、セルデン地図ではその解説文を省略して枠だけを模写したのではないかと思われる。総じて上記の論拠から、セルデン地図とピリ・レイスの地図を結びつけるのは難しいであろう。

一方、K. L. Tam（譚広濂）, “The *Selden Map*, its cartography, and its probable link with early seventeenth century Asia silk trade” は、セルデン地図は17世紀

初頭の朱印船貿易家によって作成されたと推定する。譚はセルデン地図において、日本を南北方向に長く、また台湾を二つの島として描くのは、バルトロメウ・ヴェーリョ（Bartolomeu Velho）のアジア図（1561年）に基づき、それ以外の地域の描写は他のポルトガル製地図などを参照したと推測する。さらに譚はベトナム中部やマレー半島の港市が、特に朱線で囲まれていることに注目し、これらの港市で華人商船と絹などの出会い貿易を行っていた朱印船貿易家が、本図の作成に関与していたと推定する。

譚はそのうえで、1620年に平戸のイギリス商館長リチャード・コックス（Richard Cocks）が本国に召還された際、平戸・長崎の華人海商の頭目であった李旦に負債の償還を求めたことに注目し、この地図は1509ごろ、李旦のために長崎で日本人が李旦のために作製し、それが1620年に借金のかたとしてコックスに渡され、コックスが帰航時に死去した後、ロンドンに運ばれてセルデンの手中に帰したという可能性を想定している。

ただしやはり日本の粗略な描写から見て、この地図が長崎で日本人によって作成されたとは考えがたい。地図上の地形や事物の描法、漢字の筆法なども、素人目にも日本的というよりは中国的である。その一方、譚も指摘するように、17世紀初頭の日本ではポルトガルの海図や航海情報に基づき、各種の「朱印船航海図」や『元和航海記』などの航路誌が作製されていたことは確かである。セルデン地図と同時代の朱印船航海図・航路誌との比較検討は、なおほとんど行われておらず、今後の研究の進展が期待される分野である。

また周運中「英蔵明末閩商航海図出自厦門湾」は、セルデン地図の作製主体を鄭芝龍の海商集団とする見解を批判し、東洋（東南アジア東部）航路に比べて西洋（東南アジア西部）の描写に誤りが多いことから、その作成者は西洋航路を主要交易圏とする鄭芝龍集団ではなく、東洋航路を主要交易圏とする李旦集団であったと論じる。さらに周は本図における東洋・西洋航路の起点は厦門湾の大担島であり、その作製主体は厦門湾周辺出身の、李旦またはその代理人の許心素であったと推定している。

周運中も詳論するように、セルデン地図の作製主体が閩南海商であったことは疑いないが、それを日本貿易の主導者であった李旦や許心素に比定することは、やはり日本の粗略な描写から見て難しいであろう。またこの地図における西洋航路の描写も、全体的に見ればかなり正確であり、その作製者を東洋航路を交易圏とする海商に限定する必要は認めがたい。一方、

この論文のセルデン地図研究に対する重要な貢献は、地図の左上隅、モンゴル高原の西北に記された「黄哇黎番、呵難黎番俱在此後」という附記の解釈である。すなわち「黄哇黎」の「黄」は閩南語では ng と発音するため、「黄哇黎」は England 音訳と解され、また「呵難黎」は Holland の音写と解されるという。地図上の位置的にはこれらは内陸アジアの地名のように見えるが、実際にはユーラシア西北端にイングランドやオランダが位置することを注記していたわけである。

以上、本論文集におけるセルデン地図の成立過程に関する論考の概略を紹介したが、上述のように本図では東シナ海域に比べ、南シナ海域がはるかに精緻に描かれていることから、やはり17世紀初頭に漳州湾を拠点として、南シナ海域交易に従事していた閩南海商により作製されたと考えるのが妥当であろう。したがって1608年ごろ、ジョン・セーリスがバンテンで華人海商からこの地図を入手し本国に持ち帰ったというブルックの推論は、一つの蓋然性のある仮説といえる。

一方で南シナ海域と比較していちじるしく粗略な日本の描写は、何に基づくのだろうか。譚広濂論文では南北にのびる楕円形状の日本描写は、1561年のバルトロメウ・ヴェーリョのアジア図に由来すると推定したが、最近、陳宗仁は「Mr. Selden's Map 有関日本的描絵及其知識淵源」（劉序楓主編『亜洲海域間的信息伝遞与相互認識』中央研究院人文社会科学研究中心、2018）において、この問題に体系的な検討を加えている。それによれば、セルデン地図に描かれた日本は、日本・朝鮮・中国で描かれた行基式日本図、日本で作成された南蛮屏風・御朱印船航海図の日本図、中国で描かれた各種の日本図のいずれとも一致しない。またヨーロッパで作製された地図と比較すると、セルデン地図の日本は、1569年にゲラルド・メルカトル（Gerard Mercator）が刊行した世界図における日本ともっとも近いという。

このメルカトル世界図では、漳州（チンチェオ）（Chincheo）近海から東北東方向に小琉球（Lequio menor、台湾）、大琉球（Lequio maior、琉球本島）などの島々が直線上に連なり、その先に日本（ジャパン）（Iapan）が大きな楕円形状の一島として描かれている。ヴェーリョが日本を南北に連なる列島状に描くのに対し、メルカトルは大小琉球と日本を西南西－東北東に連なる島々として描く点でセルデン地図とは異なるが、楕円形の一島という日本の造形はたしかにセルデン地図とかなり近い。陳宗仁は以上の考察をふまえ、セルデン地図の作者は東南アジアで活動した華人であり、16世紀に流布した明朝の地図

によって中国と朝鮮を、ヨーロッパの地図によって日本・台湾・東南アジアを描き、日本については特にメルカトル世界図の描写を参照したと推定している。セルデン地図が明朝やヨーロッパの複数の地図情報に基づいて作製されたとするのは、注目すべき見解であろう。ただしセルデン地図の日本描写が直接的にメルカトル世界図を参照したのではなく、当時の閩南海商の間に流布していたなんらかの日本図が、セルデン地図とメルカトル世界図の共通の情報源となった可能性も考慮すべきだと思われる。

総じて、セルデン地図は漳州湾を拠点に、南シナ海域の東洋・西洋航路を結ぶ航海・交易に従事していた閩南海商が蓄積した航海情報を基礎として、明朝やヨーロッパ（特にポルトガル）で作成された各種の地図を参照して、複合的な情報源に基づいて描かれた作品であったと考えられる。本論文集でも試みられたように、そこに記された地理情報を、同時代の文献史料・地図・航路誌・水中考古学の成果などを参照して総合的に検討することにより、明末の南シナ海域における閩南海商の航海・交易活動の研究が、さらに進展していくことを期待したい。

（中華書局〔香港〕、2015年刊、500頁）